
雨と傘と恋心

崎浜秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨と傘と恋心

【Nコード】

N4391I

【作者名】

崎浜秀

【あらすじ】

人の皮を被った悪魔と噂される大杉健太。

ある決意を胸にする山本和葉。

裏表のある女好きのモテ男、井上優樹。

友達想いの千葉美緒。

真面目でお人よしの学級委員長赤坂大河。

ちよつと いや、かなりドジな木村杏。

様々な視線から描かれたある雨の日の一紡ぎのラブストーリー…

…です。たぶん。

空模様

晴れ渡る青い空の下。学校へと向う足取りは重い。

行き交う人の波が、不思議そうに顔を見る。

当然だ。この清々しい空の下で、傘を持っていれば誰だって不思議に思うだろう。

しかし、これには理由がある。天気予報だ。

朝、いつも見ているニュース番組の予報では、午後から雨。この晴れ渡る空を見る限り、この予報は間違い無く外れる。と、思うのが普通だ。だが、奴は違った。『裏の裏を読むのだ』などと戯言を抜かし、無理矢理傘を持たせた。正直迷惑でしかない。ちなみに奴とは、一つ上の兄貴の事だ。

恥ずかしい思いをしながら、やっとの思いで校門を潜ると、視界に見覚えのある顔が映った。何やら真剣な面持ちだが、とりあえず声を掛けてみる。

「朝から、怖い顔してどうした？」

「……」

返答が無い。聞こえてないのか、無視しているのか、どちらか分からないが、ここは無難に何事も無かった様に振舞おう。と、そのまま彼女の横を通過しようとしたが、その瞬間に右手首を拘束される。

「ちょっと。何処行くつもり？」

「いや。教室に」

「あんたから話し掛けたんでしょ？ そのまま、無視していくつもりなの？」

無視して行くつもりなのって、最初に無視したのはあなたです。そう言うのは簡単だが、そうしない。言えば倍返して返ってくるからだ。俺はそこまで強いハートを持っていない。実に打たれ弱い、と自負している。

「で、何してるんだ？」

「人を待ってるの」

「ストーカー？」

「……」

返答は無く茶色の長い髪が俺の視界を横切り、彼女の右足が左側頭部を抉った。

「づづづ……な、何すんだ……」

苦痛に蹲り、彼女の顔を見上げる。威風堂々、誇らしげな顔で仁王立ちする彼女は、眩しい笑顔と優しい口調で、

「次は、保健室に送るわよ」

と、恐ろしい事をサラツと言つてのけた。てか、ミニスカートで回し蹴りつて……。普通やらないよ。何て彼女には関係ないのだから。

彼女は山本和葉。近所に住む同級生で、小学校からの腐れ縁になる。世間では幼馴染と言うらしいが、正直俺はそうは思っていない。家が近所と言っても挨拶を交わす程度だったからだ。それが、中学に上がった頃から急に話し掛けてきて、コツチはビツクリだ。

しかし、その真相は結構あつけないもので、全ては兄貴が仕組んだ事だった。その所為で、中学三年間大変だった。朝早くから叩き起こされるは、学校の男子からは妬まれるは。散々な三年間だった。

高校に進学してからは、それも少なくなっただが、何故か二度寝した時に限って、俺を迎えに来る。コイツには超能力があるんじゃないか、と本気で思った事がある。

そんな事があった所為だろう。今では大分仲が良い。少なくとも、俺は好意を抱いている。

「で、何？」

不意に和葉がそう口にした。『いやいや……何？ じゃないでしょ？』と、内心思う。思うけど、それを口にはせず、蹴られた左側頭部を押さえ和葉に目を向ける。

「お前こそ何だよ。最初に無視したのはお前だろ？」

「無視？ 何の事」

「聞こえてなかったのか？」

「だから、何が？」

声に僅かながら怒気が籠っている。本気で聞こえていなかった……のか？ 小さくため息を零し、じと目で和葉の顔を見た。その瞬間、和葉と視線が合う。脳が瞬時に目を逸らせと指令を下し、俺は視線を校門の方へと向けた。

「で、誰を待ってたんだ？」

平然を装い尋ねると、和葉は少し頬を赤く染めた。

「実はさあ。私、告白しようと思ってるさあ」

その言葉に凍り付く。俺の恋が終わった。告白する前に花弁は無残に散った。当たって砕ける……と、言う言葉があるが、俺は当た

る前に碎けて散った。

放心状態の俺に、和葉は恥ずかしそうに、それでいて嬉しそうに話す。

「ほら、私達もうすぐ卒業でしょ。ここらで、一発勝負してみようと思ってるさ」

言葉が耳に入らず、ただ適当に相槌を打つと、ポンポンと頭を叩かれた。

「ちよつとお。聞いてますかあ？」

「エッ、ああ。聞いてるよ」

「それで、どう思う。井上君の事」

「井上？」

名前に聞き覚えはある。井上優樹。同じクラスの奴で、何かと俺に突っかかってくる奴だ。成績も良く、スポーツも万能。そんな奴が俺なんか絡む理由が分からん。分かんが、俺は奴がキライだ。理由は無い。ただ、何と無くキライなのだ。そして、今、更にこいつの事が嫌いになった。

ボーツとしていると、また頭を二回叩かれた。

「大丈夫？ ボーツとして」

心配そうな和葉の声に、俺は笑顔を返す。

「だ、大丈夫だ。大丈夫に決まってるだろ。てか、いつもと変わらないうって」

「そう？」

「ああ。そうだって」

無理に笑ってみせるが、頭の中はパニックだ。その後、何を話したか覚えていないが、気付けば自分の席でボーッと空を見上げていた。

空模様（後書き）

どうも。 崎浜秀です。

久し振りの恋愛小説……不安です。

きっと、読み辛く、分かり難い作品になるかもしれません……。

一応、頑張つて分かりやすい文章、説明にしていくつもりですが、大目に見てください。

最後までお付き合いいただけると、嬉しいです。

告白

校門を潜れば、奴の顔があった。

大杉健太。俺の最もキラいな男だ。やる気の無い言動とあのボサボサの寝癖頭。何よりあの目がム力つく。人の心を見透かしている様なあの瞳が。

朝っぱらから嫌なものを見た。今日はついてない。

しかし、何であいつがあこの山本と仲が良いのか不思議だ。今も楽しみに話してやがる。イライラする。

顔を上げると奴と目が合う。あっちが気付いたかは分からないが、俺ははつきりと奴の目を見た。あのム力つく目を。

苛立ちながら足を進めると、奴が山本に何かを告げ、その直後に山本が俺の方に顔を向ける。一瞬、目が合い、ドキツと体が震えた。平常心を保つ様に軽く深呼吸をし、足を進める。視線を戻すと大杉の姿が消えていた。あいつの方も俺を嫌っているのだろう。あまり俺に関わろうとしない。空気だけは読める奴だ。

一呼吸置き、俺は笑顔を手を振る。

「おはよう。こんな所で誰か待っているの？」

優しく問い掛け、さり気なく彼女の頭を撫でる。適度なスキンシップは相手に良い印象を与える。これは、常識だ。それから、爽やかな笑顔。これさえあれば、大抵の女性は落ちる。

まあ、俺はそんなセコイ手を使わなくても女を落とす自信はある。何せ俺はイケメンだからだ。自信過剰と思う奴もいるかも知れないが、それはモテない奴等のひがみだ。モテない奴は、そうやってモテる男をけなす事しか出来ない。全く救い用の無い連中だ。大杉もその一人に過ぎない。

山本の頭を二・三度撫で顔を覗き込む。

「もしかして、俺を待っていてくれたのかな？ だとしたら嬉しいな」
「あっ、そ、その……」

慌てる様に両手を振るい、赤面する山本。コイツは実に分かり易い性格をしている。間違いない俺を待っていたのだろう。なら、次に行う行動は簡単だ。

「待っていてくれてありがとう。キミみたいな娘を待たせるなんて、ごめん」

軽く頭を下げる。すると、

「えっ、あ、あの。そ、そんなに待ってないから。そ、それに、私もい、今来た所だったから」

全く分かり易い嘘だ。さっき大杉の奴と話しをしていたじゃないか。だが、そんな野暮な事は口にしない。あくまでも何も知らなかった様に振舞う。

「そう。だったら、良かったよ。女の子を待たせるなんて、男のする事じゃないからね」

笑みを向けると彼女は俯いた。やはり彼女は分かり易い。ここまですぐに分かり易いと、逆に芝居なんじゃないかと疑いたくなってしまふ。だが、彼女にそんな芝居が出来るか、と言うとノーだ。彼女は芝居できる程器用じゃない。それは、普段の彼女を見ていれば分かる。素直でとても人を騙せる様な娘じゃない。あくまで俺のデータ上では、だ。

俯く彼女に大らかに笑い、優しく声を掛ける。

「どうしたの？ 何か用があつたんじゃないのかな？」

「えっ、あ、あの……そ、その……」

口籠る山本。何か大事な話でもあるのだろう。

「ここで話し辛いなら、移動しようか？」

「そ、それじゃあ……」

山本は俯きながら歩き出した。何か話にくい事なのか、人気の無い所へと移動する。ある程度予測はしている。こいつは俺に気がある。さっきの反応でそれが分かった。それじゃあ、これからする事と言えば、告白だ。それ以外考えられない。

俺の予測通り、体育館裏へやって来た。告白の定番の場所だ。やはり、告白するつもりらしい。

彼女が足を止めると、俺も同時に足を止めた。

沈黙。そして、

「好きです！ わ、私と、付き合ってください！」

予測通り、彼女は告白した。

告白しちゃった

告白しちゃった。遂に、井上君に。

なが〜い長い沈黙。彼の返答はまだ無い。

緊張が高まり、胸が張り裂けそう。脈動する心音が体内を巡り、体が震える。

彼の顔を見る事が出来ず、俯いたまま目を瞑りひたすら願う。こんな時、人は神に願ってしまう。神様なんて信じてないけど。

無音の闇の中で返答待ち。僅か数秒が、何十分にも長く感じる。合格発表の時より緊張する。

木の葉が舞い静けさが破られた。迷惑な話だ。この場面でなんで木の葉が、空気読めって。

長い長い数秒が過ぎ、ようやく井上君が口を開いた。

「俺なんかでいいのかな？」

遂に返ってきた返答に、私は耳を疑う。

これは夢？

誰かホッペを抓ってくれ。

『俺なんかでいいのかな？』だって。

エッ、それってどういう事？

てか、それってオーケーって事じゃないの？

はやる気持ちを抑えながら、私は顔を上げる。すると、あの爽やかな笑顔が私の胸を打ち抜く。

アウツ。やられたぜ。と、よろめくと同時に彼が右手を掴み、体を支えた。

「大丈夫？」

「は、はい!」

思わず声が裏返り、緊張しているのがモロバレ。それでも、何も無かった様に微笑むと、彼も微笑んでくれた。

落ち着け、落ち着け。そんな言葉を自分に言い聞かせ、小さく深呼吸する。もう何が何だかサッパリ分からず、私の脳内は拍手喝采と、某野球球団の優勝の時の様な騒ぎとなっていた。

喜びたい気持ちを必死に抑え込む。まだちゃんとした返事を貰っていないからだ。これで、ぬか喜びだったら、私立ち直れないよ。彼の目を真っ直ぐに見据えると、彼がもう一度微笑んだ。あの笑顔は反則だよ。私はどうすりゃいいんだ。完全に魅了されちゃってます。

自我を保つのに精一杯の私に、彼は優しい口調で言葉を掛ける。

「嬉しいよ。キミみたいな美しい女性に好意を持ってもらえるなんて」

「そ、そんな」

美しいだなんて、と思わず口にしてしまいそうになったが、それを呑み込み、目を逸らした。面と向かってそんな事を言われると、どうも照れてしまう。もう絶対目を合わせらんないよ。

困り果てていると、井上君の声が耳に届く。

「それで、付き合っに当って、キミにお願いがあるんだ」

「お願い？」

突然なんだろう。まさか、結婚を前提にとか。そ、それは速過ぎるよ。井上君。

妄想が更なる妄想を生み、巨大に膨れ上がる中、井上君が口を開く。

「お願いって言うのは、大杉健太とはもう二度と関わらないでくれ」
膨れ上がった妄想が一瞬で音を起てて破裂した。
何を言ってるんだろ。

何かの冗談かな、と笑い飛ばそうとしたが、彼の目が本気だった。
そして、更に言葉を続ける。

「キミの様な娘が、彼の様な低能な人間と仲良くしていると、キミも彼の様になってしまふ」

健太を馬鹿にする様な言葉遣い。それが少しだけムカついた。何も知らないくせに、好き勝手言うなよ、とも思った。

それでも、怒りを堪え笑顔を保つ。何かの冗談だって、言ってくれと信じていたから。

「それって、何かの冗談だよな？」

「冗談？ そんなわけないだろ。俺、アイツの事正直キライなんだよね。何の取り柄も無いくせに、強気なあの目が特にキライ。アイツを見ると、ムカつくんだよ。だから、キミも、アイツに近付かないでくれるかな？」

プツン、と何かが私の中で弾け、怒りが湧き上がる。

何も知らないくせに、好き勝手に言いやがって。

拳を握り、キツと睨んだ。しかし、彼は気付かず言葉を続ける。

「それでさ、キミの返事はどうなんだい？」

返事。そんなの決まっている。返事は

「断るわ。そんな馬鹿な条件聞けるわけないでしょ」

はつきりと言ってやった。けど、相手は全く動じない。それ所か、予期していたかの様に笑う。

「ハハハッ。やっぱり。そう来ると思ったよ」

高笑い。さっきまでとはまるで違う雰囲気。後退ると、壁が背中を押した。逃げ場を失ってしまった。

「俺さ、馬鹿には興味ないわけ。所詮、お前も馬鹿ってわけだ。こんな人気の無い所に連れ込んでさ」

「クツ……。最低ね。男としても、人としても」

目付きだけは強く、相手を睨み付けながら言葉を発する。だが、彼は恐れず着実に私に近づく。

親友

校門を潜った私は、親友の山本 若菜の姿を発見した。誰かと話している様だが、人波でその人物の姿は見えない。そうこうしている内に、二人は体育館裏の方へと消えていった。

一体誰だろう。不意に考え込む。

男である事は確かだ。二人が移動する時に学生服を着ているのが、チラツと見えた。

和葉が男と会話。中々珍しい事だ。

相手は大杉だろうか？

けど、それなら珍しくも無いが、別に体育館裏へ行く必要性は無い。

なら、誰だ。

考えてみるが答えは出ない。大杉以外に、親しい男なんていたかどうか？

そもそも、和葉があの大杉と親しい事も不思議なくらいなのに……。

これは、私から見た価値観だが、彼、大杉 健太は一言で言えば、掴み所の無い少し変わった奴。と、言うより存在が無いみたいに思える。

教室に居ても周りの事に無関心だし、昼休みはすぐ居なくなる。

一部の噂では人の皮を被った悪魔だと、言われた事もあった。

そういわれる様になったのは、校舎裏にたむろって居た不良数名を、そりゃ酷い位にボコボコにし、病院送りにしたと言う事件が起きたからだ。

その時、一人の不良が『悪魔が』何て言う不可解な言葉を残した事と、その時間帯に校舎裏付近で大杉の姿を見たと言う証言があった事から、大杉が悪魔と言う事になったが、結局証拠が出なかった為、それも単なる噂と言う事になった。それが、真実がどうな

のかは未だに不明だ。

そんな危険人物が、和葉と親しい事は私の中では学園七不思議の一つになっている。

だが、今はそんな事はどうだっていい。結局、和葉は誰と一緒になんだろうか。

それだけが気になって仕方がなく、いけない事だと思いつつも彼女の後を追う様に体育館裏へと急いだ。

私が体育館裏へ着くと丁度、和葉の声が聞こえた。

「最低ね。男としても、人としても」

やけに怒気が籠っており、すぐに何かあったのだと気付いた。けど、私は状況を把握する為に、壁に隠れながら様子を窺った。

和葉の姿が男と重なる。何が行われているか分からないが、危険な状況な事だけは察知し、すぐに飛び出す。

「和葉！」

声に男が反応を示す。と、同時に和葉が男の手を振りきり走り出した。私の横を駆け抜けるその目に、僅かに涙が滲んでいる様に見えた。彼女の姿を目で追い、すぐに男の方を睨んだ。

振り返った男は、私の顔を見るなり不快な表情を見せた。

「邪魔が入ったか……」

「井上……。あんた」

そこに居たのは井上優樹だった。成績優秀、スポーツ万能、容姿端麗。大杉とはまるつきし正反対の非の打ち所の無い彼が、どうして和葉を。

頭の中は錯乱する。

「千葉、何してくれてんだよお前」

低音の声。いつもと違う雰囲気、私も尻尾を吊り上げ反論した。

「あんだこそ、何してんの。私の親友に何かしたら許さないわよ」

あくまで強気にそう言うと、井上は平然した表情で笑い、その場を去っていった。彼が去った後、私は暫くその場を動く事が出来なかった。

雨

シンシンと水滴が落ちる。

窓ガラスを叩く大小様々な雫。

いつしか澄んだ青空が、雨雲に包まれていた。

予報では午後から雨と言っていたが、少し遅い雨脚だ。

雨音が心を癒す。泣きたい俺の代わりに、空が泣いてくれているから。実際、そんな事は無いのだろうが、この雨が無かったら、今頃俺は号泣している。

ポーツと窓の外を見つめた。和葉の奴、どうなっただろう。一時限目は遅刻して来たわけだから、何かあったに違いない。

不意に和葉の方に視線を向ける。だが、いつもと変わらない様子で授業を受けていた。俺の気のせいだろうか。

しかし、気になる。告白はうまく行ったのだろうか。俺的に言わせて貰えば、告白が失敗してくれる事を願うが、和葉が悲しむ顔は見たくない。そんな気持ちもあり、複雑な心境だ。

深くため息を漏らす。俺はこんなにも切ないのに、授業は続く。早く帰って泣きたい。時間がこれ程まで長く感じるのは、久し振りだ。

過ぎ行く時間。黒板にカツカツと音を立てるチョーク。先生の声。全てがうるさい。今日と言う日が、早く終われと願い、俺は机に顔を伏せた。

暫くして、目を覚ます。

不覚にも寝てしまっていた様だ。

ホームルームも終わり、教室には掃除当番位しか残っていない。全く持つて不覚だ。

逃げ遅れてしまった様だ。

「おい。大杉。今日はサボるなよ」

そう。俺は掃除当番だ。完全に逃げ遅れた。これでは、掃除をし
なければならぬ。早く帰って泣きたいのに……。

「クツ……。寝過ぎすとは、不覚だ……」

誰にも聞こえない程、小さな声で言っただけだが、奴には聞こ
えたらしい。

「不覚だ、じゃなくて、掃除はちゃんとしてくれなきゃ困るよ。全
く」

小柄な男。コイツはウチのクラスの委員長、赤坂大河。世話好き
でお人よし、掃除当番など関係なく、毎日放課後は掃除をしている
責任感の強い奴だ。

そもそも、赤坂の奴が委員長をやっているのも、誰もやりたがる
奴がいなかった為、担任が『出席番号一番のお前がやれ』と、無理
矢理押し付けたものだ。それでも、委員長の仕事を真面目にこなし
ているんだから、凄いものだ。

「大杉、聞いているか？ 掃除しろよ」

「あーあ。めんどくせえ」

「面倒でも誰かがやらなきゃいけないんだよ」

赤坂は俺にホウキを押し付けた。こりゃ、掃除をしないと帰さな
い、と言わんばかりだ。渋々と立ち上がり、窓の外に目をやった。
雨は激しさを増している。カサを持ってきて正解だった。兄貴にち
よっただけ感謝する。

「ちよっと！ サボってないで掃除しろよ！ 全く」

「分かってるって」

赤坂は口うるさい。まるで嫁をいびる姑の様だ。ただでさえ傷心して弱っていると言うのに、更にいたぶるか。情け容赦も無い奴だと、言ってもコイツは何も知らないのです、仕方ない事なのだが。

文句を言うわけにもいかず、掃除をする事に。しかし、教室の掃除なんて久し振りだ。高校に入って初めて。だと、記憶している。

「何で俺が〜」

「口じゃなくて手を動かしてくれよ」

全く口うるさい。

「なあ、他の連中はどうしたんだ？」

「他の連中？」

「まさか、俺とお前だけじゃないだろ？」

気がついてなかったわけじゃないが、今教室に居るのは俺と赤坂の二人だけだった。おおよそ予測はしていたが、赤坂は相変わらずの口調で返答してきた。

「キミと僕しか居ないけど、どうして」

「……まさかと思うが、いつもはお前一人でやってんのか？」

問い掛けに考え込む様に右手を顎に添える。暫く返答を待つか、唸り声だけが返ってきた。お人よしと言うか、真面目と言うか、メチャクチャ損する性格なんだな。シミジミそう思ってしまう。

そこへ、女子生徒が戻ってきた。藍色の髪を頭の後ろで束ねた眼鏡を掛けた彼女は、俺の顔を見るなり、切れ長の目で俺を睨む。

ええつ。俺、何かしましたか。焦りまくりの俺、考え込む赤坂、睨み付ける女子生徒。緊迫の空気の中、赤坂が女子生徒に気付く。

「オツ。美緒じゃないか。結局、今日も手伝う事にしたってわけか」

赤坂が美緒と呼んだ女子生徒が足を進める。俺の方へ一直線に。

おいおいおい。マジで俺は何か悪いことでもしたのか。身に覚えがないが、何だ。思い出せ。思い出せ。

「ああつ。そうか。お前、同じクラスの」

「おい。悪魔」

エエーッ。最初の発言が悪魔つて、何。俺はそんなに怨まれているのか。ただ、同じクラスだって事と、名前を忘れていただけじゃないか。

俺のガラスのハートは、度重なるショックに耐え切れず粉々に砕け散った。もう立ち直れねえ。俺はもうダメだ。

灰色に燃え尽きた俺は、呆然と立ち尽くす。何も考えらんねえ。

マジで泣きたい。今すぐ泣きたい。もう何も考えたくない。

悪魔の本性

突然だった。

教室に現れた幼馴染の千葉 美緒が大杉に「おい。悪魔」と暴言を吐いたのは。

驚いた様子の大杉。もちろん、僕だって驚いた。いきなり、「おい。悪魔」じゃあ、誰でも驚くに達しない。いきなり何言ってるんだよ、って。このままだと、喧嘩になりうると判断し、僕は咄嗟に二人の間に入った。

「ちよ、ちよっと！ 美緒。いきなり悪魔は失礼だろ！」

美緒の顔を見る。変化は無い。それから、大杉の方に顔を向け、

「大杉も美緒に何したんだよ」

その言葉に大杉の体が僅かによろめく。貧血か？ っ、って、コイツそんなに体が弱かったかな？ でも、一部の噂じゃ数十名の名高い不良共を一人で全滅させる程タフな奴だと、聞いている。そんな奴が貧血なんて、何かかっこ悪いぞ。

とりあえず、美緒の方に顔を向ける。いつになく怖い表情。

『おいおい。マジで何やったんだよ。大杉』

などと考えていると、美緒が更に暴言を吐く。

「あんだ、人の皮を被った悪魔なんですよ」

「んなつ」

驚きの声を上げる大杉に思わず、

「そうだったのか。大杉は人の皮を被った悪魔だったのか」

納得してしまった。まあ、様々な噂を耳にしていれば、納得して当然だろう。正直、僕も幾つか悪い噂を耳にしている。僕の知っている噂はどれも人間離れた事ばかりで、信憑性に欠けるモノだが、実際にその噂通りの事が起っている為、嘘とも言い切れない所がある。

そんな恐ろしい悪魔の様な男に、無謀にも暴言を吐いた美緒。あなたは何を考えているんですか。そう問いたい。

しかし、大杉は 相当ショックを受けている様に見える。本当に人の皮を被った悪魔と呼ばれる程の人間なのか、と疑いたくなる程弱っていた。

「あううっ……」

「何とか言いなさい。悪魔」

これがトドメだったのか、大杉が両肩を落とす。つ、つつつ、遂にキレルのか。

恐怖と期待が入り混じる。あの悪魔と呼ばれる男の本性を拝める。そんな事、滅多にない。滅多にないが、この場において生きて帰れるのだろうか。と、不安になる。が、まあ、その時はその時だ。人間、その気になれば何とかなるモノだ。

そんな期待に満ち溢れた視線に、美緒が気付いたのだろう。いつも以上に冷やかな視線が僕の方に向けられていた。

「あなたは掃除でもしてて、私は彼に話があるの」

このままでは、悪魔の降臨を拝む事が出来ない。そう、直感した僕はこの場に残る為の口実を考える。

「エエツ。掃除を手伝いに来てくれたんじゃないのかよ」

少しワザとらしいが、僕にしてはまずまずの芝居。今は掃除なんかよりも、悪魔の降臨が見たいんだ。それだけが、僕の脳を活発に動かしていた。

「それに、大杉だって掃除当番なんだ。僕一人に掃除を押し付けるのはどうかと思うよ」
「……」

沈黙。これは、僕に軍配が上がったと見ていいのだろうか。不安が脳裏を過り、美緒の目が大杉の方に向けられた。

「悪いけど、チョット付き合っつて。ここじゃあ、コイツがうるさいから」

ちょ、チョット待て！ 何て強行策を実行してんだ！

そう言いたいのが、ここは我慢する。僕とて何年も彼女と無駄に一緒にいたわけじゃない。対処法は幾つか知っている。

「僕ら友達だろ。掃除くらい手伝ってくれよ」
「……」

間が空く。その間も突き刺さる彼女の視線が痛々しい。それでもなお、僕は笑顔で彼女の顔を見つめる。

「誰が？」

沈黙を破ったその言葉に目を丸くする。言うに事欠いて、誰が、だと。ここは断固として講義しなければならぬ。

「僕と美緒がだよ」

「……ごめん。上手く聞き取れなかった。もう一度言っ

「だから、僕と美緒だよ」

もう一度発言すると、美緒の眉間にシワが寄る。眼鏡の奥の目が明らかにさげすむ様に、僕を睨む。嫌悪感を全面的に押し出した才一ラすら感じる。

そんな空気の読めない振りをしていると、流石に美緒が怒気の籠った声で言っ。

「あんた、いい加減空気を読みなさいよ」

「残念ながら僕も退く訳には行かないんだよ」

「……分かった。それじゃあ、いきましようか」

そう言っくと、美緒は悪魔の手を掴む。緊張が走る。悪魔と呼ばれる男、大杉の反応に。

しかし、大杉は特に反応を示す事は無く、美緒に引っ張られ教室から消えた。結局、僕は何も知らぬまま、一人教室に残された。

大杉健太

教室では邪魔が入ったが、ここなら安心。

私は、人の皮を被った悪魔こと、大杉健太と非常口前に居た。特に人気もなく、さっきの様に空気を読まない馬鹿は存在しない。完全に大杉と二人きり。

様々な噂が私の中に広がり、恐怖が脳裏に過る。体の震えが止まらず、表情を読み取られない様に背中を向けたまま言葉を発する。

「あ、あんたに、話がある」

声が震える。それに大杉が気付いたのか分からないが、返答が返ってきた。

「あの……話って？」

あれ？ 意外に普通。と、言うより何処か弱々しい様に感じる。悪魔って呼ばれる位だから、もつと怖い返答が返ってくると思っていた。「なんだよこのアマ」とか、「ぶっ殺すぞ」とか、暴言を吐かれるものだと思っていた。

イメージとの違いに呆気に取られていると、不思議そうな表情を彼が向ける。

「あのさ、話が無いならそろそろ……」

「あつ、待って。話って言うのは和葉の事なの」

その言葉に大杉が沈黙する。不意に振り返る。すると、動きを止めた大杉の姿があった。背中を向けたままだが、圧倒的な威圧感。これが、悪魔と呼ばれる男の放つオーラ。

そのオーラに吞まれない様、自らを落ち着かせる為、息を静かに吐く。そして、意を決し言葉を告げる。

「今朝の事だけど、和葉が井上と体育館裏で何か話してたみたいなの。それで」

「な、何で俺にそんな話を？」

僅かに声が震えている様に感じたが、悪魔と呼ばれる男がそんなわけあるはずが無いと、聞き流し言葉を続けた。

「あんだ、和葉と仲良いみたいだから」

「そ、そう。でも、俺にそんな話してもしょうがないって」

彼がそう言い歩き出す。えっ、それだけ？ ちよつと冷たすぎるんじゃない。そう思い更にその背中に私は言葉を続ける。

「でも、彼女泣いてたんだよ。それでも」

私の言葉を見殺して、彼は去っていった。まるで自分には関係ないと、私に告げる様にして。一人残された私は、誰も居なくなつた廊下に叫ぶ。

「この人の皮を被つた悪魔め！」
と。

悪魔

背後から声が聞こえた。

きつと千葉の奴が俺に対して言った言葉だろう。

だが、そんな言葉など耳に入っていない。怒りで周りが見えていなかった。本来なら怒るべきでは無いのかも知れない。泣いたと言つても、振られて泣いたかも知れないからだ。

それでも、俺は奴が悪いと決め付け、奴を探す。真相を聞く為に校舎を歩き回る。雨で湿った廊下は、歩きたびにキュツキュツと音を起てた。嫌な音だが、今は全く気にならない。

暫く歩いた後、聞き覚えのある声が聞こえる。

「なあ、いいだろ」

「あ、あの、止めてください」

女性の声と、あの男の声。

「どうせ、暇だろ。俺達と付き合えよ」

「そつだぜ。退屈させないぜ」

続けて別の男の声が二つ。奴の友人だろう。しかし、両方共下品な声質だ。

「あ、あの、ほ、本当に急がしいので」

「いいのか？ 俺の誘いを断ったら、周りの女からどんな仕打ちを受けるか」

奴の言葉に、残り二つの下種な笑い声が響く。最低な奴だ。仕舞いには脅迫。そんな奴に淡い恋心を抱いた和葉は。

本当はここで俺が怒るのは全くのお門違いだ。それでも、コイツだけは許すことが出来ず、俺は奴の前に姿を見せ、言葉を発していた。

「嫌がつてんだろ。手を放せよ」

辛うじて怒りを堪える俺は、奴の顔を見ない様に僅かに俯き加減で立っていた。今、奴の顔を見たら怒りが爆発してしまうからだ。俺は基本的に、非暴力主義だ。出来る限り話し合いで解決できればそれで良いと思っっている。あいつとは違うのだ。

俺の存在に奴の友人二人が気付き、ゆっくりと歩み寄る。

「オイオイ。誰だか知んねえが、調子にのんなよ」

「ここに居るのが、誰か知って言っただけなのかよ」

名前も知らない二人組みが、俺の周りをチヨロチヨロする。目障りだが、ここは我慢する。別にそこまで気にする様なものじゃない。自らを落ち着かせる様に息をゆっくりと吐く。

「お前に話がある」

声を震わせ言った。すると、奴は鼻で笑い、静かに言う。

「俺の方は話なんて無いんだけど、てか急がしいんだけど」

「嫌がつてる女の子を脅す事が……か？」

俺の言葉に僅かに動揺したのだろう。井上の手を振りきり女子生徒が俺の横を駆け抜けて行った。これで、心置きなく話し合える。

「チツ。テメエのせいで逃げられたじゃねえか」

「どうしてくれんだよ」

その他の二人が俺に突っかかってくる。全くうるさい。でも、まあいい。とりあえず、奴と話を進めよう。

「井上。お前、今朝和葉と何を話した」

「ああっ？ 今朝？ さあて、何の話だっけな」

「テメエに関係ネエだろ！」

突如頭部に激痛が走る。一瞬視界が闇に包まれたが、すぐに意識は戻った。

「イツツ……」

右手で額に触れると、ヌルツとした感触があり、それが血であるとすぐにわかった。俺は殴られたのか。背後に目を向けると、男の一人がホウキを持っていた。それで、殴られたのだろう。俺の血が僅かに付着している。

イツテエ。頭が割れる様にイテエ。コイツ、何してんだよ。マジで。

色んな感情が湧き上がり、俺は自然とホウキを持った男を睨んだ。

「な、何だよ。やんのか？」

男の声が僅かに震えている。そして、もう一人の男が気付く。

「お、オイ。や、やべえつて。こ、コイツ」

「何だ？ 何ビビツてんだよ」

豹変した男の態度に、ホウキを持った男がおどけた様子でそう問

う。すると、震えた手で俺を指差し、

「こ、コイツ、あの噂の悪魔だ……」

「悪魔って、ま、まさか……」

ようやく、ホウキを持った方も気付いたらしい。俺が人の皮を被った悪魔と呼ばれている事に。恐怖に顔が引き攣り、ホウキを握り締めたまま硬直する。

そして、俺の視線に気付いたのか、震えた声で言う。

「し、知らなかったんだ！ ゆ、許してくれ！」

捨て台詞を吐いて男達は逃げ出す。人を殴っておいて、知らなかった、で許されるわけが無い。だが、今はとりあえず、井上だ。奴と話をしない事にはどうにもならん。

額から溢れた血が右目を塞ぐ。傷は浅い様だが、頭と言うのは大袈裟に血が流れるものだ。

振り返ると井上が尻餅を着いていた。先程の二人の会話で、おおよその事情を知ったのだろう。おまけに手を出しちゃいけない奴に手を出した、と言う事にも気付いたのだろう。表情が先程とは正反対だ。

「や、止める！ お、俺は、わ、悪くない。俺は悪くないんだ！

山本の奴が一方的に」

「一方的にどうした？」

少しだけ声色を変えて尋ねる。すると、「ヒッ」と、情けない声を上げて言葉を続ける。

「こ、告白を、お、オーケーする代わりに、お前と縁を切る様に言

ったんだ。そ、そしたら、急に怒り出して」

半べそ状態の井上。流石にこれ以上やると、本気で泣き出してしまいそうだ。俺も別にそこまでするつもりは無い。それに、元々話を聞いたかっただけで、ここまで大事にするつもりは無かった。だから、最後に忠告だけする事にした。

「もう和葉には近付くな。いいな」

「わ、分かった。ち、近付かない。だ、だから」

「消える。今すぐに」

俺の言葉に悲鳴の様な声を上げ、井上が走り去って行った。実に甘いと自分でも思う。それでも、平和的に解決出来たので良しとしよう。

「たく……。イ……テエ……」

急激に体が重くなり、俺はそのまま意識を失った。

殺人事件です

ガツン。

鈍い音。

飛び散る血。

一時は逃げ出してしまいましたが、戻ってみるとトンデモナイ状況に。

流血する大杉君。ひ、ひひ額が　大変な事になってます。わ、私どうしたらいいのでしょうか。神様。

慌てます。慌てています。もう大混乱です。

こんな状況で非力な私に何が出来るとでしょうか。慌てていますと横を二人組みの男の人が走り去っていききました。あの方々は、先程まで大杉君を囲んでいた方々。一体、何があったのでしょうか。凄く怯えた顔をしていた様に見えましたが　気のせいでしょうか。

ちょこつと角から顔を出し、様子を窺ってみます。何やら状況が変わった様で、井上君が腰を抜かしています。

あれれ？　怪我をしているのは大杉君なのですが、どうして井上君の方が圧倒されているのでしょうか？

疑問に首を傾げていますと、妙な奇声と共にバタバタと逃げる様な足音が聞こえました。何事でしょうと覗いてみますと、流血した大杉君だけが倒れていました。

キヤーツ！　さ、殺人事件です。私は、犯罪の目撃者です。

慌てて駆け寄ります。まだ息があるかも知れません。

「だ、大丈夫ですか？」

呼びかけてみますと、僅かに眉が動きました。まだ息はあるようです。流石に校内で殺人事件など起こるはずがありません。少しがっかりです。べ、別に期待してたわけじゃないんですよ。ただ、警

察の事情聴取と言うのを、間近でみたかっただけなんです。

そんな事よりも、今は手当てが必要です。保健室に運ばなければ……私一人ですか？

それは無理つてモノですよ。体力の無い私にどうやって……。しかし、火事場の馬鹿力と言うのが在ります。ここは力の限り頑張らせていただきます。

「しっかりとしてください。今、保健室に連れて行きますから」

彼の体を持ち上げ様と、腕を引きます。

「……うっつ。……お、重いです」

やはり私の力では全くピクリともしません。これは、考え方を変えなければと、閃きました。

簡単な事だったのです。保健室から救急箱を借りてくれば、全て丸く収まります。と、言うわけで、保健室に行つてまいります。戻ってくるまで、動かないで下さい。心でそう呟き、急ぎ足で保健室へと向いました。

保健室には今日も誰も居ません。保健医の先生はいつも何処に行っているのでしょうか。疑問も残りますが、今はそんな状況では無いので、救急箱を借り保健室を後にしました。

戻ってみると、相変わらずグツタリとした大杉君の姿が。血を流しすぎたのでしょうか。輸血が必要なら、救急車でも。そう思いながらもガーゼで止血します。傷は思ったほど浅い様で、救急車の心配は無さそうです。ガーゼを固定する為、何重にも包帯を巻きました。自分でもビックリする位上手に巻けたと思います。

意識を失つて十分位でしょうか、ようやく大杉君が目を覚まししました。

癒し

目を覚ますと、天井を見ていた。

あの後倒れてしまったのだろう。頭がズキズキ痛み、右腕を額にゆっくり乗せた。

ヌルヌルとした感触は無い代わりに、ザラザラの感触を指先に感じた。

「んっ？」

思わず声を発すると、視界にショートボブの女子生徒が顔を出した。穏やかな目が俺を真っ直ぐに見据え、幼さの残る声が言葉を紡ぐ。

「目が覚めたみたいですね。頭の方は大丈夫ですか？」

言葉からするに、彼女が傷の手当てをしてくれたのだろう。

まだ朦朧とする頭で考え込んでいると、少しだけ長めの前髪から覗く潤んだ瞳が、俺の目を真っ直ぐに見つめているのに気付いた。返答を待っているのだろう。すぐに返事をする。

「もう大丈夫だ」

「それじゃあ、これは何本に見えますか？」

と、彼女が右手の人差し指と中指を立てる。馬鹿にしているというわけでは無さそうだが、一応聞いておこう。

「何のマネかな？」

「一度でいいからやってみたかったです。ですから、何本に見え

ますか？」

満面の笑み。何を期待しているのかは分からないが、とりあえず答えておこう。

「二本……だろ」

「はい。良く出来ました。頭は大丈夫みたいですね」

「木村、俺の事馬鹿にしてるか？」

「してませんよ」

笑顔の木村に、俺は小さくため息を吐いた。

彼女は木村杏。同じクラスの女子だ。ちなみに、話をするのは今日が初めてになる。大人しく教室でも目立つタイプでは無いが、少しだけ いや、大分抜けた性格をしている。俺の観察からして、その抜けっぷりは常人をはるかに上回っている。修学旅行に行けば迷子になり、走れば転ぶ、授業中はボーッとしてる。何も無い所で転ぶ事もあり、階段を踏み外す事も多い。

可愛らしい外見とその抜けっぷりがウケ、男子からの人気は厚い。ファンクラブもあると、噂を聞いた事もある。

その人気通り、彼女には不思議と癒され、傷の痛みを忘れる事が出来た。

「傷の方も良さそうなので、私はこれで」

「ああ。ありがとうな。傷の手当てしてくれて」

「いいえ。私も先程助けられましたから。お互い様です」

彼女がそう言い微笑んだ。俺もそれに微笑み返した。

男

な、なんだ、アイツは　あの目は　。

恐怖。それが、俺の両膝を震わせた。

奴は悪魔だ。あの目はそう言わざるえない。間違いなく殺される。そう錯覚した。

「ハア…ハア……」

どれ位走つただろう。ひたすら走つた後、廊下に転がった血の付着したホウキを見て足を止めた。あれは、栢山が大杉の頭を殴つたホウキ。アイツ、こんな所に放置しやがって、バレたらどうするつもりだ。

そう思い、それに手を伸ばした時、ビュツと風を切る音と共に何かが俺の前髪を掠めた。思わず尻餅を着くと、小さな舌打ちが聞こえた。顔を上げると、そこにジャージ姿の一人の男が立っていた。頭には深々と帽子を被り、顔は見えない。

「だ、誰だ！」

「……」

返答はない。その代わりに、呻き声はその男の後ろから聞こえた。そこに目を向けると、栢山と内村の二人が倒れていた。腹部を押さえ悶える二人。俺は恐怖で言葉を失った。

男が拳を握り、静かに俺の方に足を進める。

「だ、誰なんだ！　や、止めてく　」

言葉を言い終える前に、男の足が俺の右頬を蹴り飛ばした。

「みつともねえな。命乞いなんて」

蔑む様な目が俺を見る。な、なんなんだこいつは。一体、俺にどうしろって言うんだ。

頭の中が混乱する。そんな中で、男がゆっくり足をあげる。

「それじゃあ、オヤスミ。そして、サヨウナラ」

彼の言葉の意味を知る前に、回し蹴りが俺の脳髓を貫いた。その時、帽子が飛び茶色の長い髪が見えた。だが、見えたのはそれだけで、俺の視界はすぐに真っ暗になった。

雨宿り

大杉君と別れ、私は足早に正面玄関へと急ぎました。実の所、私は友達を待たせていました。怒っていないか心配です。玲子ちゃんは優しい方なので、怒っては居ないと思いますが、万が一と言う事もあるので。

出入口付近で、携帯を弄っている玲子ちゃんが居ました。遠くから隠れて様子を窺います。見た感じ、怒ってはいないようですが、ここは慎重に行かなければなりません。

「スーツ……ハアーツ」

深呼吸です。心を落ち着かせ、いざ行かん。と、意を決した瞬間、目の前に顔が現れました。

「遅いよ。杏ちゃん」

玲子ちゃんです。とっても笑顔です。そして、私にデコピンしました。

「はづづつ……。痛いです」

「痛くないでしょ。それに、傘はどうしたのかしら？」

「……傘？」

はて？ 何の事でしょうか？

首を傾げますと、今一度玲子ちゃんのデコピンが額を弾きました。非常に痛いです。

潤んだ瞳で玲子ちゃんを見つめると、小さなため息を零し、

「杏ちゃん、傘を取りにいったんでしょ？ 違う？」
「……………あつ」

そうでした。私、傘を取りに行ったんでした。しかしながら、持ってきたと思っていた傘は教室にはありませんでした。きっと、何処かに忘れてきたんだと思います。良くある事ですから。

「今の『あつ』は、完全に忘れてたわね」

「うっうっ……………。違うんです。忘れてたじゃなくて、忘れてきたんです」

「……………」

玲子ちゃんが凄く呆れた様な目で私を見ます。いつになく厳しい視線です。

「杏ちゃんは、その性格直さなきやダメよ」

「はうっう。努力はしてるんです。でも、でも」

「わかってる。分かってるわよ。杏ちゃんは努力してるんだよね。ただ、それが活かさされないだけだよね」

「それって、私が馬鹿だから？」

潤んだ瞳で見つめると、玲子ちゃんが目を逸らしました。

「それより、どうでしょう？」

玲子ちゃんがそう言います。流石に雨に濡れて帰る程、度胸がありません。風邪はひきたくありません。それは、玲子ちゃんも同じ様で、困った表情を見せたまま黙り込んでしまいました。

傘

ようやく、掃除が終わった。結局、大杉は戻ってこないし、美緒も戻ってきてすぐ教室を出て行った。何でも、先生に呼ばれたこの事。

しかし、何で僕が一人で教室を掃除しにやらんのだ。全く納得いかない。掃除当番は何の為にあるんだ。不満を抱きながら、カバンを持つと電気を消してから教室を出た。戸締りは 大杉の奴がしてくれるだろう。全く学級委員長なんて損な役回りだけだ。

折り畳み傘を右手に持ち、鼻歌混じりで歩みを進める。人とすれ違う事も無く、正面玄関へと辿り着いた。流石にもう人は残っていない様だ。

「ハア……。何で俺が」

「あつ、赤坂君です」

「あら。今帰りなの？」

木村と高橋の二人。同じクラスの仲良し二人組みだ。

「ど、どうしたの？ こんな時間まで残って」

慌ててそんな言葉を口にする、高橋の方が穏やかな笑みを浮かべながら答える。

「雨脚が強いから、少し弱まるのを待ってるのよ。赤坂は？」

「ぼ、僕は掃除をしたんだよ」

「ふえええつ。今まで掃除してたんですか。大変ですね。委員長も」

「そ、そんなこと無いよ」

テレを隠す様に、顔を背けた。正直、僕は木村の事が好きだ。だから、褒められるのは慣れていても、流石に好きな子に褒められるのはどうも歯がゆい感じがする。

顔が妙に熱い。やばい。緊張してきた。何を話したらいいんだろう。悩めば悩む程、頭の中は真っ白になって行く。

言葉に詰まっていると、高橋の方が意味深な笑みを俺の方に向け、

「どうしたの？ 赤坂君」

「い、いや。な、ななな何でもないよ」

「どうかしたんですか？」

あまりの慌てっぷりに木村が心配そうな表情を向ける。その目が可愛い。マジで、そんな目で見ないでくれ。心臓が破裂してしまいそうだ。頭がショートしてしまった様に、脳内が真っ暗になった。脳内の電源が完全に落ちた。

機能が停止したロボットの様に立ち尽くしていると、目の前を高橋の手が上下に往復する。

「赤坂くん。大丈夫？」

「ふあい……ふえいきれす」

呂律が回らない。そんな僕を更に心配そうな目で木村が見つめる。その視線に脳内の機能が更にショートする。

「あーあ。ダメよ。杏ちゃん。ほら、もっと離れて」

「ふええええつ。どうしてですかあ。私、嫌われてるんですかあ？」

木村の目が涙で潤む。そんな木村をあやす様に、高橋が何やら耳打ちをする。すると、木村の顔が見る見る赤くなり、

「はづづづつ。赤坂君のエッチです！」

などと、突然叫ぶと、随分遠くまで離れていった。

『赤坂君のエッチ』

その単語が脳内を巡り、僕はシヨックで気を失いそうになる。そんな僕を支えたのは、高橋だった。

「大丈夫？」

「……ダメ。もうダメだ……。僕の人生は終止符を迎えた……」
「まあまあ。大変ね」

他人事の様にそう口にする高橋。全く、誰の所為だ。
シヨックの大きさに、思わず膝まずいてしまったが、気力で体を
持ち直す。

「たぁーかぁーはぁーしいー」

擦れた声で高橋に掴みかかると、高橋はニコツと大人びた笑みを
見せる。

「どうかした？」

「お前、木村に何を言った」

「あら？ 気になるの？」

気にならないわけが無い。好きな子に『エッチ』と、言われたんだぞ。それで気にならない奴の顔を見てみたものだ。

しかし、相変わらず他人事の様に楽しげに微笑んでみせる高橋は、

「大丈夫よ。ちょっとした伏線を引いただけだから」

「伏線？」

「そうそう。杏ちゃんには、『赤坂は雨に濡れる私達を想像しているの』って、言っておいただけよ」

「だけじゃないだろ。それでだけで十分嫌われるだろ……。お前、知ってるだろ。俺が木村の事好きだって」

そう。高橋は僕が木村の事が好きだと知っている。いつ頃か忘れてたが、言われた。

『杏ちゃんは結構鈍いから大変よ』

と。何故、バレたのか分からないけど、高橋曰く『赤坂は分かりやすい』との事。僕ってそんなに分かりやすいのか、と本気で悩んだことがある。

「それで、さっきの伏線の事だけど」

「ああーっ。もうダメだ……」

「聞ってる？ 赤坂」

「うっうっ……たあかあはあしい。お前だけは許さないからな……」

高橋を睨むと、引き攣った笑みを見せる。そして、木村の方に顔を向け、

「杏ちゃん。赤坂が傘貸してくれるんですって」

「ふえええっ。ホントですかあ？ 赤坂君。優しいです」

さっきの言葉は何処へやら、木村は僕のすぐそばまで来て、僕の右手を握り締める。その瞬間、僕の脳内で巨大な爆発音が轟き、思考がまた停止した。

幼馴染

職員室を出て、正面玄関へと向う。

正面玄関前まで来ると、声が聞こえる。一つは聞き慣れた大河の声。あと二つは、多分同じクラスの女子二人。

とっさに身を隠してしまった。何故、そうしたのか分からないが、とりあえず様子を窺う。

女子の一人は高橋玲子。クラスでもお姉さんタイプの大人びた人。私も彼女に何度か相談を持ちかけた事がある。

もう一人は木村杏。そのドジっぷりが男子からの人気を集める少し変った不思議ちゃん。何も無い所で転ぶのは日常茶飯事で、私も良く転んでいる所を見かける。女の私から見ても、正直可愛いと思う。

「ありがとうございます。赤坂君」

「それじゃあ、傘は明日返すからね」

木村と高橋の二人がそう言い、大河の黒の折り畳み傘を広げ、外へと出て行った。その二人に手を振る大河の後姿が、何とも情けなく見えたのは、私だけだろう。

二人の姿が見えなくなるまで手を振った大河は、小さなため息と一緒に両肩をガックリと落とした。あいつ、どうやって帰るつもりだろう。やっぱ、濡れるのかな？ と、思いながら静かに背後に迫る。

「あーあ。どうしよう。傘……」

ブツクサと小言を言う大河に迫り、耳にフツと息を吹きかけた。

「フワアアアッ！」

奇声を発し飛び上がると、スッと私の方に顔を向ける。

「な、なな、何すんだよ！」

「元気そうね」

「当たり前だろ。てか、耳に息を吹きかけるな」

声を張り上げる大河。中々面白い。けど、眼鏡に唾を飛ばすのは止めて欲しい。

眼鏡のレンズに付いた唾をハンカチで拭いた後で、眼鏡拭きで綺麗にレンズを拭き直す。

「唾を飛ばさないで」

「うるさいな。大体、その眼鏡、度が入ってないだろ？ 何でそんなの掛けてんだよ」

「あんたに関係ない。それより、どうするの？」

「どうするって？」

コイツは分かっているみたいだ。この雨の中、傘もなしにどう帰ろうと言うのだろうか。濡れて帰るつもりなら、それも見てみたものだ。風邪を引かれるのは困る。

「この雨で、歩いて帰るつもり？」

私の言葉に大河が困った表情を見せる。そして、私の手にある傘に気付き、笑みを浮かべた。

「言っとくけど、入れないから」

大河が発言する前に、即刻言う。出鼻を挫かれ呆けている大河の顔が、面白い。実に表現力豊かだ。表現力の乏しい私から見れば、非常に勉強になる。しかしながら、オーバーリアクション過ぎではないだろうか。

観察していると、大河が引き攣った笑みを浮かべた。

「良いじゃないか。家も向いなんだし」

「……」

「ほら、僕達、幼馴染だし……」

「……」

「だからさ……」

「……」

私の冷やかな視線に、ついに大河が壊れた。

「うがあああつ！ 傘をよこせ！」

「うるさい」

傘で軽く頭を叩く。ぎゃああああつ、と悲鳴がこだまし大河が横転する。幾らなんでも、オーバーすぎるだろ。コイツには羞恥心と言うのが無いのか。幼馴染と言え、今までこんな奴と関わっていたと思うと恥ずかしい。

小さなため息を漏らすと、大河が急にスツと立ち上がった。

「ふう……」

やけに冷めている。先ほどの大騒ぎはどうしたのだろう。

「もういいや。んじゃ。帰るわ」

濡れる覚悟を決めた様だ。しかし、風邪を引かれるわけにはいかない。一応、ウチのクラスの委員長だからだ。

「あら、傘に入れてあげようと思ったんだけど」

「なぬつ。それはまことか？」

「喋り方が変」

「うぬつ。あやつは、山本殿ではないか」

「和葉？」

振り返ると、表情の暗い和葉が見えた。声を掛けようと思ったが、そんな雰囲気ではなく、和葉も私と大河に気付かず、その横をただどしく歩いて行く。まるで抜け殻の様だった。

雨の中の少女

教室に戻ると、既に電気が消されていた。

掃除は赤坂が一人でやってくれた様で、黒板にデカデカと『戸締りは任せる！』と赤チョークで書かれていた。白じゃなく赤と言う所が赤坂らしい。

しかし、折角綺麗にした黒板が、既にグチャグチャじゃないか。

小さなため息を零しつつ、戸締りをして教室を出た。途中、職員室にカギを返し、玄関口まで行くと、イチヤイチャしている二人組みを発見した。

あれは間違いなく赤坂と千葉だ。あの二人、付き合っていたのか。

驚きから声を出しそうになり、思わず身を隠す。何だかヤバイ現場を目撃してしまった。困惑する俺に、千葉が言葉を投げかけてきた。

「出て来い！ 大杉」

「エッ！ 大杉？ 何処にいるの？」

キョロキョロする赤坂。何故だ。何故、千葉にばれた。もしかして、何かの能力者だろうか？

色々と不可解な点が残るが、とりあえず千葉に言われた通り、姿を見せる。あんまり待たせると、何を言われるか。

「で、何か用？」

「美緒、怒ってる？」

「お前はうるさい」

千葉が赤坂の額をグーで殴った。痛々しい音。コイツは和葉と並

ぶ暴力つぷりだ。

痛がる赤坂を尻目に、千葉が言葉を続ける。

「それで、何？ あんたも殴られたい？」

「いや。それは結構だ。つてか、二人は付き合ってるのか？」

俺の言葉に千葉が顔を真っ赤にして、俺の額をグーで殴った。

「はっっ」

あまりの痛さに変な声が出た。こんなパンチを赤坂は毎回受けていると思うと、凄いなんだと思う。

痛みに耐え、立ち上がると、赤坂が表情を歪めながら、

「大丈夫？」

と、尋ねた。全く平気ではなかったが、とりあえず、

「大丈夫……」

そう答えた。すると、痛みに慣れているのか、既に復活した赤坂が思い出した様に、

「まあ、そんなことよりさ、さっき山本さんが雨に濡れて帰ってたけど、追わなくていいの？」

と、聞いてきた。何故、俺にそんな事を言うのか分からないが、千葉の顔を見るとそんな事を口にしようものなら、もう一発パンチを貰いそうだと、判断し言葉を呑む。その様子に僅かに頷く千葉が、睨みを効かせ、

「さっさと追え！」

「はい？」

「今すぐ、和葉を追え！ このノロマが！」

急に悪態を吐いた千葉が、俺の背中を蹴った。

「痛いだろ！ 何すんだ」

「うるさい！ さっさと行け！」

千葉が俺の背中をもう一度蹴った。背中を蹴られた俺は、外へと追い出され雨に濡れる。ああ……何の為に傘持ってきたんだよ。て、位ずぶ濡れ。

振り返ると、赤坂が苦笑いを浮かべ、何故か千葉は睨んでいる。

睨む前に何か言う事があるだろ。そんな目を向けると、

「行け」

この一言だ。どっちが、悪魔何だか。ため息を零すと、更に怒声が響く。

「さっさと行く！」

「わかった。わかったって。行けばいいんだろ。行けば！」

小さな反抗をして、俺はその場を立ち去った。あの場に居ようモノなら、次こそ間違いなくボッコボコにされてしまう。何だか、赤坂の苦勞が分かってしまうのは、千葉が和葉に似ているからだろうか。

そんな事を考えながら、右手に持った傘を差す。流石にこれ以上濡れたくは無い。

傘を片手に帰路を辿ったが、和葉の姿はまだ見えない。おかしい。そろそろ和葉と出くわしても良い頃だが……。もしかすると、道草か。だとすると。

俺はすぐ様来た道を引き返し、右折する。雨の中を走っているとすれ違う人々に迷惑そうな目を向けられた。だが、今は人の目を気にしている場合じゃない。人と人の間を駆け抜け、俺は公園の前で足を止めた。

「はあ…はあ……。見つけた……」

公園に佇む少女。茶色の長い髪が雨に濡れ、毛先から雫が滴れる。制服も雨で体に張り付き、下着が透けて見えていた。

歩み寄った俺は、和葉に傘を掛けてやり、学生服を脱いでそっと頭に被せた。

「風邪引くぞ」

「……」

返答は無い。代わりに和葉の頭が俺の胸に押し付けられる。

「大丈夫か？ 具合でも悪いのか？」

学校での事は知っていたが、とりあえずそう尋ねる。すると、俺の胸に頭を押し付けたまま、和葉が首を振った。それからやや遅れ、掠れた声が聞こえる。

「フラれ……ちゃったよ……」

それは、雨音にも負ける程小さな声だったが、俺にはハッキリと聞き取れた。そんな和葉の頭を俺は優しく撫で、

「あいつに見る目が無かったんだ。だから、気にすんなくて」
「違う……。私の方が……。見る目無かった。あんな奴……。好きにな
るなんて……。ううっ」

声の上擦る。肩を震わせ泣いている。よっぽど悔しかったのか、
シヨックが大きかったのか、どちらか分からないが、俺は彼女の肩
を抱き、泣き止むのを待った。

私は待つよ

私は泣いた。

胸の奥に溜まっていたモノを吐き出す様に。ただひたすら涙を流した。

その間、健太は何も言わず、私の肩を優しく抱き締める。

服に染み込む雨の匂い。きつと必死に探してくれていたんだ。健太の温もりに、心が安らぐ。そんな気持ちになった。安心したからか、涙が止まっていた。それでも、健太の胸に頭を押し付けたまま、私は動かなかった。雨脚も弱まり、辺りは静まり返っている。静かな雨音を聞いていると、健太の声が聞こえてきた。

「あのさ……。俺じゃ……。ダメか？」

突然の事に戸惑う。ま、まさか、コイツに告白されるなんて……。思ってもいなかった。顔が熱くなるのを感じ、何も言えずにギュッと健太のTシャツの裾を握り締める。すると、健太が静かに言葉を続ける。

「こんな時に言う事じゃないと思うんだけど、俺、ずっとお前の事が好きだった。だから、井上と上手く行かなくて正直安心してる」

随分とハッキリと言う。少しは私の気持ちも考えて欲しい。

「ごめん。何だか場の空気が読めなくて……。でも、俺はお前の支えになりたい。ずっと、隣りで笑ってて欲しいんだ」

くさい！ くさ過ぎる。聞いている私の方が恥ずかしくなる程くさい台詞。それを口にした健太は、きつと私よりも恥ずかしいと思っ

ているんだろう。その後、言葉を中々発しない。

沈黙。どれ位続いたか分からないけど、痺れを切らした様に健太が口を開く。

「なあ、和葉」

「なによ……」

とりあえず、返事をする。恥ずかしくて顔を上げる事が出来ず、彼の顔は見れない。でも、何と無く健太の表情は想像できた。ずっと、ずっと彼を見ていたから。小学の頃からずっと。優しく、暖かで、誰からも慕われる彼が好きだった。でも、あの日は変わった。そして、私も。

だから、彼への想いを心の奥にしまっていたのに……。そんな事を言われたら……。

「俺は井上みたいに、運動も勉強も出来ない。そんなに人に好かれてるワケでも無い。お前に相応しく無いのは重々承知している。だから」

言葉が途切れる。鼓動が一層早くなり、頭の中が真っ白に。困惑する私の肩をギュッと握る健太が、私の目を真っ直ぐに見つめる。

「俺と」

健太が言い終える前に、私はその体を押し退けていた。傘が宙を舞い、ゆっくりと落ちた。

驚いた様子の健太は、下唇を噛み締め俯く。

「い、ごめん……。でも」

「うるさい！ このバカ！ 何、こんな時にこ、告白なんか」

顔から火が出るくらい恥ずかしかった。それでも、これだけは言っておきたくて、更に声を荒げる。

「いい。本当に私が好きなら、こんな時じゃなくて、もっとちゃんとした時に」

「ちゃんとした時っていつだよ」

「エッ、そ、それは……」

突然の反論に口籠ると、健太が言葉を続ける。

「俺は、お前が好きだ」

ストレートなその言葉に戸惑う。真っ直ぐな目が、私を見つめる。視線を外す様に俯き、呟く。

「わ、私、理想が高いの」

僅かに震えた声に、健太が答える。

「だったら、俺はお前に相応しく変わってやる」

「本当に？ カッコよくなれる？」

「ど、努力する」

「何よ、努力するって」

「いや……。まあ、その……」

口籠る健太は少し間を空けてから、

「理想通りになれるか分からないけど、最善は尽くす。それでも、ダメなら」

「諦めるの？ 私は待つよ」
「へッ？」

突然、奇声を放つ健太は、目を丸くしている。当の私も、自分の言った言葉に赤面し、俯く。

「あ、あの、それって……」
「か、勘違いしないでよ。待つって言うてもずっとじゃないんだから」

テレを隠す様にそう言うと、健太が嬉しそうに笑みを見せる。

「俺の事、待っててくれるんだな」

「だ、だから、別にあんたを待つわけじゃ」

「そうテレなくて はうっ」

回し蹴りを見舞った。派手に吹っ飛ぶ健太は、水溜りに頭から突っ込んだ。

「な、何すんだ！」

「か、帰るわよ」

「コラ！ 謝れ！ ま、待てって！」

健太の言葉を無視して、私は地面に転がる傘を取り歩き出す。その間も背後から響き渡る健太の声。その声に思わず笑みがこぼれてしまった。

雨のち晴れて… 【完】

泥まみれの衣服。

しかし、派手にやられてしまった。まさか、あそこで回し蹴りをくらくとは、我ながら不甲斐無い。

傘を肩に掛け、楽しそうに前を歩く若菜。のん気なものだ。コッチは人とすれ違う度に白い目で見られているって言うのに。これも全て、若菜の所為なわけだが、アイツはいつまで傘を開いているつもりなのだろう。

ため息を吐き肩を落とすと、不意に振り返った若菜と目が合った。澄んだ瞳に思わず視線を外すと、若菜が歩み寄り頭に巻かれた包帯に手を添える。

「 イッ！ 何すんだよ」

「 ゴメン。でもさ、これどうしたの？ また喧嘩？」

困った表情の若菜。またって、俺は年がら年中喧嘩してるわけじゃない。と、言うより、腕っ節に自信が無いのに、ワザワザ喧嘩なんかしない。そうでなくても、広まった悪名で恐れられているのに、喧嘩なんかした日には退学モノだ。

「 喧嘩なんてするわけないだろ。ただでさえ、誰かさんの所為で悪名が広まってるんだから」

「 へーッ。そうなんだ」

「 他人事みたいに言うなよ」

「 だって、他人事じゃない。まだ」

完全に他人事の様だが、半分以上は彼女が原因だ。今、思い返せば散々濡れ衣を着せられてきた。中学一年の時は学校一の不良集団

を壊滅させ、仕舞いには町中の不良集団を次々と潰していった。中学二年時は、修学旅行の宿泊先である旅館の一室を破壊。その時部屋に居たのは俺と若菜だけ。日頃の行いが悪い所為か、俺がその犯人にさせられ部屋の修理代を請求されたのは、凄く覚えてる。他にも話せば色々あるが、思い出せば出すほど、悲しくなってしまう為、この辺にしておこう。

深いため息を漏らし、首を振ると若菜が不満そうな表情を見せる。

「ねえ、バカにしてる？」

「いや。ただ、色々あったなって思って」

「色々って？」

「まあ、そりゃ色々さ。それより、今日は何もやってないよな？」

「うえっ？ な、ななな、何い、いいい言って」

見て取れる完璧な動揺。コイツ、さては。

「お前、何やらかしたんだ？」

「べ、別にたいした事じゃないよ。チョット、三人程のしただけ」

「三人……って、まさか」

脳裏に過る放課後の鮮明な記憶。この様子だと間違いない。井上達の事だろう。

しかし、これでまた俺の悪評が。

ため息と一緒に肩を落とすと、若菜が頭の包帯の事を思い出す。

「そ、それよりも、その包帯の事だけど」

「あんな……」

そこで言葉を呑んだ。若菜が心配そうな表情で俺を見ていたからだ。そんな顔をされちゃ、流石に皮肉を言う事も出来ず、小さなた

め息を漏らし、素直に答えた。

「殴られたんだよ。ホウキで」

「ホウキ……って、もしかして」

何かを思い出した様に若葉の表情が変わり、不適な笑みと共に、指の骨を鳴らした。

「そう。あいつ等ね。そうなんだあ。フッフッフ……」

不適な笑い声を発する若葉は、悪魔の様な表情を見せる。そう。本当の人の皮を被った悪魔は、俺ではなく若菜の事を指す。それを知っているだけに、怖い。怖すぎる。一体、何を考えているんだろうか。

想像するだけで悪寒が走るが、とりあえずここは宥めなくては。俺の悪評が更に広がってしまう。

「別に大した傷じゃないし、若葉が気にする事ないって」

「何言ってるの！ あんたは、私の彼氏になるのよ！ 大体、傷痕残ったらどうするのよ」

「まだ、彼氏候補じゃなかったっけ？」

「そ、そう。彼氏候補。でも、顔の傷はマイナスなんだから」

何やら顔を赤らめているが、何か変な発現でもしたのだろうか。とりあえず、ここは話を逸らす事が出来たので、よしとしよう。

一息入れる様に、深く息を吐く。隣りを歩く若葉の顔を横目で見ると、きつと、俺はまだ彼女に相応しい男じゃない。それでも、こうして彼女の隣りを歩いていられる幸せを噛み締め、沈み行く夕日に自然と笑みを浮かべた。

雨のち晴れて… 【完】（後書き）

どうも。作者の崎浜秀です。

いかがだったでしょうか？ 『雨と傘と恋心』

語り手が目まぐるしく変わる……と、言うスタイルで書かせてもらいましたが、読みづらかったでしょうか？

まあ、自らの力量も分からず、こんな事に挑戦してみたわけですが、この作品は自分が昔書いた作品です……。つい懐かしくなり投稿したわけです。

短い作品でしたが、最後までご付き合い頂きありがとうございます。感想や評価、アドバイスなど貰えれば嬉しいです。

次回恋愛小説を書く事があれば、また読んで頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4391i/>

雨と傘と恋心

2011年10月3日02時03分発行